

2014 年台湾統一地方選挙及び中国の 対台湾政策の展望

— グリーン陣営¹からの考察 —

顔 建 発

(台湾・健行科技大学企業管理学部教授)

【要約】

台湾の大型選挙は中国の対台湾政策に大きな影響を与える。2014年に実施された統一選挙は、地方選挙であったが、その規模は過去最大であったため、2016年の総統選挙を占う重要な指標とみなされている。選挙は2014年11月29日に実施され、議席数、得票率のいずれにおいても国民党の惨敗、民進党の快勝という結果に終わった。中国にとっては楽観できない結果となったことから、かかる状況を前にし、中国の対台湾政策は何らかの衝撃を受け、変化するのだろうか。本論では、習近平の性格や習慣、政治体制及び外的環境の制約に基づき、また、中国が既定路線となっている安定の中の進展を依然として維持し、対台湾政策においても既存の大方針に従い、戦わずして台湾を屈服させるため、台湾の囲い込みや取り込みを図り、硬軟織り交ぜながら、心理戦によって台湾を追い込もうとしていることを踏まえ、中国の対台湾政策の内容には変化が生じるかも

¹ グリーン陣営とは、民進党の政治理念に近い諸政党の総称。ブルー陣営とは、国民党の政治理念に近い諸政党の総称。

しれないが、構造や基調は維持されるものと論じる。

キーワード：2014年台湾統一地方選挙、中国の対台湾政策、国民党、
民進党、兩岸関係

一 はじめに

長きにわたり、中国の対台湾政策は基本的に中国国民党との関係と抱き合わせの政策により処理されてきた。1999年7月9日、国民党の李登輝総統が「特殊な国と国の関係」を打ち出し、続く2000年3月18日の総統選挙で陳水扁と呂秀蓮を総統、副総統候補とした民進党が勝利を収め、台湾初の政権交代が起こると、中国の対台湾政策の推進には後退の波が生じ、民進党政権の8年間を通じて、海峡兩岸は常に「連携」が困難な状態にあった。2008年3月22日の総統選挙において、国民党代表の馬英九と蕭萬長が勝利し、二度目の政権交代を成し遂げると、兩岸関係の発展は再び国共による交流の路線を回復し、同年末に三通が実現したことで、兩岸の連携によって広範な交流が進められるようになった。

1996年に台湾が総統の直接選挙を実施して以降、総統選挙が兩岸関係の発展を左右する主な変数となり、2000年及び2008年の政権交代はいずれも中国の対台湾政策に大きな影響を与えた。次の2016年の選挙でもまた政権交代があるのか、中国の対台湾政策はまたしても衝撃を受けるのか、多くの人が関心を抱いており、これに先立って実施された2014年の統一地方選挙は、地方選挙であったものの、特に、九つの選挙が実施され種類・規模のいずれも過去最大であったことから、同選挙の過程と結果は間違いなく2016年の総統選挙の大勢を判断する重要な指標となる。

更に、今回の統一選挙前、一般的に国民党の選挙見通しは暗く、何議席失うかが争点となっていた。選挙には勝敗がつきものというのが民主主義の常であるが、意義が異なるのは、選挙結果が中国の「一つの中国」原則に衝撃を与え、こうした転換が8年に一度のペースで繰り返されるのか、それとも過去二回の政権交代は偶発的な

ものであったのか、政権交代が常態化するのか、選挙結果の激震を受けて中台関係が変化するか誰にも予想できないという点である。これはまた中国がとりわけ関心を抱く議題であると同時に、その影響はアジア太平洋地域の発展にも衝撃を与える。

中国が策定する対台湾政策は、一貫して「一つの中国」を立論の核心・基礎としており、1978年に改革開放を実施して以降、経済的に台頭し、総合国力を向上し続けている。台湾が自身の独立発展路線に影響を与えられる空間やカードはますます縮小しているが、民主化プロセスの発展に伴って、自身の道を歩むという台湾人の意識や意志が徐々に高まっていることは疑いようがない。よって、2016年の総統選挙で民進党が再び勝利した場合、两岸関係にどのような影響が生じるか、選挙結果が中国の対台湾政策に与える影響は如何なるものか、質的、或いは量的なものか、その変化は中国が策定する一つの中国の枠組みとどれほど乖離したものとなるか、中国の指導者である習近平はどのような対策をとってこれに対応するかを、以下、本論で掘り下げる主な重点とする。

二 国共指導下の中国寄りの两岸構造

2008年3月に実施された台湾の総統選挙では、国民党の馬英九が勝利を収め、两岸政策は大きく変化した。馬英九総統が、同年末に三通を開放したことで、两岸関係の交流はより緊密な方向へと舵を切り、交流は更に進展した。国家安全会議（NSCに相当）秘書長を務めた蘇起は、「馬政権は海と空の直行を成し遂げ、两岸の人々の往来を便利なものとし、歴史的・地理的なタブーを突破し、戦争を避けて平和を開花させる治療プロセスに着手した」²と評価し、また

² 蘇起「馬政府時期兩岸關係の概況與展望」蘇起、童振源編『兩岸關係的機遇與挑戰』

チャード・ブッシュ前米国在台湾協会（AIT）理事主席も「……2008年5月に総統に就任して以降の馬英九総統の取り組みは、台湾海峡の安定した秩序を構築する努力である……安定は台湾と中国の双方の利益であるのみならず、米国の利益とも一致する」³と評価している。

上記二つは肯定的で機能的な角度から見た兩岸関係であり、ある現象については自ずと正確に描写しているが、馬政権の開放にかかる努力によって、台湾が過度に統合され、高い依存性を抱えた構造的苦境に陥ったことは軽視されている。チャンスにリスクはつきものである。2008年12月31日、胡錦濤は『台湾同胞に告ぐる書』発表30周年記念の場で、「手を携えて兩岸関係の平和的發展を推進し、心をつなげて中華民族の偉大な復興を実現する」と題する講和を発表し、6点の対台湾政策方針を明確に示した。この6点からすると、馬英九による何年もの努力の結果、台湾は更に中国の対台湾戦略の枠組みに組み込まれ、ますます抜け出せない苦境に陥っていることが容易に理解できる。ビジネスによって政治を囲い込み、経済によって統一を促進するという中国の戦略的主張は変わっておらず、台湾が体系的な依存に陥っていることは事実であり、以下でその分析を示す⁴。

- (1) 政治面：胡錦濤が「一つの中国を遵守し、政治的相互信頼を増進する」と主張したのに対し、馬英九は「92年コンセンサス」、「一つの中国について、各自がそれぞれに表明する」及

（台北：五南、2013年）、頁25。

³ ト睿哲著、林添貴譯『台湾の未来：如何解開兩岸的爭端』（Untying the Knot: Making Peace in the Taiwan Strait）（台北：遠流、2011年）、頁17。

⁴ 顔建發「國民黨の中國政策」『台湾國際研究季刊』第9卷第2期（2013年夏季號）、頁74。

び「兩岸人民は共に中華民族に属し、兩岸関係は国際関係ではない」ことを強調した。

- (2) 経済面：胡錦濤が「経済協力を推進し、共同の発展を促進する」と強く主張したのに対し、馬英九は三通による直行を推進し、兩岸経済協力枠組協定の締結とこれへの足並みの一致を主張した。
- (3) 文化面：胡錦濤が「中華文化を発揚し、精神的な結びつきを強化する」と強調したのに対し、馬英九は兩岸の文化交流の深化を強く主張し、教科書から台湾独立の色彩が強い部分を削除する動きを採った。
- (4) 社会面：胡錦濤が「人員の往来を強化し、各界の交流を拡大する」と強調したのに対し、馬英九は「中国からの留学生及び配偶者の来台にかかる規制緩和」、「兩岸人民関係条例の全般的な見直し・修正」、「两会の事務所相互設置」によってこれに応えた。
- (5) 外交面：胡錦濤が「国家主権を擁護し、対外問題を協議する」と強調したのに対し、馬英九は2007年に打ち出した選挙公約「外交休兵」を既に実践し、中国と、国交のある国を取り合わないことを主張し、「台湾が参与する国際的活動空間について中国と協議する」と応えた。
- (6) 軍事面：胡錦濤が「敵対状態を収束し、平和協議を達成する」と強調したのに対し、馬英九は陳水扁政権時代の「国境外決戦」から「防衛の固守」という消極的姿勢に転じた。

馬英九の対中姿勢と胡錦濤の対台湾政策は、符節を合するかのよ

うに、文化協議、政治折衝と軍事的相互信頼メカニズムに関していわゆる「深水区」に踏み込んでいるが⁵、一時的に前進しない停滞した状況にあることは明らかである。国共双方が、一つの中国の原則と一つの中国の枠組みを基本的なコンセンサスにしていることから、深水区にかかる国民党の躊躇は、すでに中国が非難する口実と化している。

実際、兩岸の大局的な交流においては、国民党は成果を得たが、最終的には、「枠組み」を以て中国共産党と「部分的内容」について取引するという対価を払った。つまり、大局的な戦略からすると、国民党は完全に共産党が設定したストーリーの中でプレーしており、完全に共産党が描く青写真の下で動いているわけで、よって、国民党は平和という褒美を得ても、所詮は共産党の戦略的意図や構想の中での成功に過ぎない。こうした状況下で、兩岸が高度な交流を継続することに反対する人々は、将来、中国資本が党・政治・ビジネスをリンクさせ徒党を組んで台湾に押し寄せ、台湾企業の生態を崩壊・消滅させ、統一の圧力がどんどん台湾に流入してくることを懸念している。続く中国側の海峡兩岸関係協会の在台事務所設置は、中国が国境を越えて台湾に攻め入り、軍の整合を完成させることを象徴するものであるが、国民党はこれを批判することもできず、また中国のシステムに入って共産党と争うこともできず、進退窮まり、身動きが取れなくなるだろう。

他方、台湾内部では兩岸交流プロセスが密になるにつれ、多くの台湾人がアイデンティティにかかる強い欲求を意識するようになっ

⁵ 鄧小平はかつて、中国の改革は石を確かめながら河を渡るようなものであると述べている。つまり、川縁の浅瀬は石も触りやすいが、深瀬に入ると石は触りにくいことに擬えて、改革が抵抗に遭うと、前進するのはより困難で、やり難くなるとの意。『百度知道』、<http://zhidao.baidu.com/question/235183978.html> を参照。

た。社会学の観点からすると、アイデンティティの出現と強化は、往々にして他者とのより深く密接な交流の後に生じる。アイデンティティの高まりは、統合に対する疑念や拒否という形で現われたが、これは国共がシステム的な統合を強調し、プラスの機能的な側面のみを見て、マイナスの側面を軽視した結果直面する難題である。中国返還後の香港人の主体意識や独立意識は返還前に勝っていることもこれを例証している。また、2014年3月に台湾で起きたひまわり学生運動において見られた強烈な反中感情や12月の統一選挙におけるグリーン陣営の大躍進もその一端である。

三 グリーン陣営の台頭

1 2014年以前に実施された3回の地方選挙における二大陣営の推移

2009年12月5日には3つの統一選挙（県市長、県市議員、郷・鎮市長）、2010年11月27日には5都市における3つの統一選挙（直轄市市長・市議員・里長）が実施され、結果、以下の通りとなった⁶—5つの直轄市長と17の県・市長のうち、国民党から15人、民進党から6人が当選した。合計314人の議員が選出された5つの直轄市議会選では、国民党・民進党共に130議席（各41.4%）を獲得した。17の県・市議会選では、592議席のうち、国民党が289議席（48.8%）、民進党が128議席（21.6%）を獲得。郷・鎮市長では、国民党から121人（57.3%）、民進党から34人（16.1%）が当選し、明らかに国民党が民進党より優勢となった。14の県で合計2322人が選出された郷・鎮の市民代表選では、国民党から715人（30.8%）、民進党から169人（7.3%）、無所属から1,436人（61.8%）が当選した。5都市の

⁶ 中選會「歴屆公職選舉資料」『中選會選舉資料庫』、<http://db.ccc.gov.tw/histMain.jsp?voteSel=20091201C2>（2015年1月21日）。

村・里長選では、里長選で国民党から1,195人(31.81%)、民進党から220人(5.86%)、無所属から2,341人(62.31%)が当選した。合計4,074人が選出された17の県・市・村・里長選では、国民党から1,023人(25.11%)、民進党から52人(1.28%)、無所属から2,999人(73.61%)が当選し、基層レベルでは、無所属が国民党をはるかに上回り、また国民党が民進党よりはるかに多い議席を獲得した。

2009~2010年の選挙結果から以下の通りまとめることができる。県・市長戦では国民党が大きくリード、市議員では両党が五分五分、県・市議員では国民党が大きくリード、郷・鎮市長でも国民党が大きくリード、郷・鎮市民代表では無所属が優勢だったが、二党を比較すると国民党が民進党を大きく引き離し、村・里長でも無所属が優勢だったが、やはり国民党が民進党を大きくリードした。戦況からすると、基本的に二政党による争いの形相を呈したが、郷・鎮市民代表や村・里長では無所属が多数を占め、二政党による競争構造とはならなかったものの、やはりブルー陣営がグリーン陣営を大きくリードした。ただ、直轄5都市の市長選挙では、国民党から3人が当選し、44.5%の得票率を得たのに対し、2人しか当選しなかった民進党が49.9%の得票率を獲得し、国民党より5.4%、40万票近く上回っている点は留意すべきである。

2012年1月14日に実施された総統・立法委員選挙では、国民党の馬英九・呉敦義の「馬呉ペア」が51.60%を得て、45.63%の得票を得た民進党の蔡英文・蘇嘉全の「英嘉ペア」に勝利した。その差は5.97ポイント、約80万票であったが、2008年の総統選における馬英九・蕭萬長の「馬蕭ペア」が、民進党の謝長廷・蘇貞昌の「謝蘇ペア」を17%、約221万票差で勝利したことを考えると、国民党の勢いは明らかに低下していた。立法委員選挙では、国民党は2008年の81議席から、2012年には64議席へと議席数を減らし、得票率も52.4%

から48.12%へと減少した。他方の民進党は、27議席から40議席へと議席数を伸ばし、得票率も37.5%から44.45%へと上昇し、2012年の立法委員選挙における二政党の得票率の差は3.67%まで縮まった⁷。

2 2014年の統一地方選挙では二政党が逆転

2014年11月29日の統一地方選挙では、直轄市長、県市長、直轄市議員、県・市議員、郷・鎮市長、郷・鎮市民代表、村・里長、直轄市山地・原住民代表及び区長の九つの選挙が実施された。同選挙では、11,130人もの地方公務員が選出され、種類の多さ、規模の大きさは過去最大となった。統一選では、直轄市、県市長候補が「便乗効果」を発揮し、すなわち「雌鶏が雛を連れてくる」状況となっており、同政党の候補者の票を呼び込んだため、その勢いは増していき、二大政党対決の形相を呈した⁸。政党は、候補者選びや選挙戦略の調整に責任を負い、「コーディネーター」的役割を担ったことから、極めて重要な役割を果たした。

2014年末の統一選を控え、国民党は2013年末前に全国7000人余りの村・里長の候補者選びを早くも終えていた。村・里長は末端の「根回し」役であり、つまりこれは国民党が末端の地方派閥の統合を既に終えていたことを意味する。国民党の下部組織は、綿密かつ相当にはっきりと役割を分担しており、例えば、いわゆる「五大システム」と呼ばれる「青年会」、「婦人会」、「住民サービス所」、「ボランティアグループ」、党労働者幹部等があり、地方の党部もみな国民党の正式な組織で、党中央は「人情」と「利益」によって動員し、

⁷ 同上。

⁸ 謝相慶「2014年九合一地方選挙之評估與效應」『國政研究報告』財團法人國家研究所、<http://www.npf.org.tw/post/2/13654>（2015年1月19日）。

意のままに指揮することができる⁹。地方における民進党の組織力は、資金不足のためまとまりを欠いており、下部組織の運営にしても国民党より脆弱である。しかし、国民党は下部組織がしっかりしているものの、外省人からなる旧軍人村や老兵を主な党员としており、かかるグループの組織は急速に衰退しているため、国民党と世論の乖離は日に日に広がっている。連戦が党主席に選出された 2001 年の選挙では、党员は 92 万人だったが、馬英九が 2 度目の党主席に当選した 2009 年には 53 万人にまで減少し、3 度目の当選を果たした 2013 年には 38 万人、現在では 34 万人にまで減少している¹⁰。

こうした状況下において、馬英九の声望が低迷する中でも、その意志や権力は地方の末端まで深く入り込んでいるため、かえって国民党候補者の負担となっている。馬英九の声望は一般庶民の間で極めて低いのみならず、国民党内の党员からの支持も低下気味で、2009 年の国民党主席選挙では約 28.5 万票、得票率 94.18%を獲得したが、2013 年には、約 20.2 万票、得票率 91.85%となっている。

先の統一地方選挙において、各政党は直轄市、県・市長戦での勝利を目標とした。上述の通り、国民党が大勢を占めた 2009 年及び 2010 年の県・市長と直轄市選挙、2012 年の総統・立法委員統一選挙を通じて、両陣営の政治版図は消長しているが、総体的には「北部は国民党系、南部は民進党系」の構造に変化はない。2012 年の総統

⁹ 路懷宣「年底七合一、民進黨『會嚇死』！」『udn 評論台』2014 年 1 月 28 日、<http://blog.udn.com/ntlutw/10820790> (2015 年 1 月 19 日)。

¹⁰ 南方朔「南方朔：史上得票最低的黨主席」『蘋果即時』2015 年 1 月 20 日、<http://www.appledaily.com.tw/realtimenews/article/forum/20150120/544971/%E5%8D%97%E6%96%B9%E6%9C%94%EF%BC%9A%E5%8F%B2%E4%B8%8A%E5%BE%97%E7%A5%A8%E6%9C%80%E4%BD%8E%E7%9A%84%E9%BB%A8%E4%B8%BB%E5%B8%AD> (2015 年 1 月 20 日)。

選挙で、馬英九は15の県・市で勝利したが、7の県・市では敗北している。敗北した7の県・市のうち、台南市・高雄市・宜蘭県・雲林県・嘉義県・屏東県は民進党が執政を握り、嘉義市のみで国民党が執政を握っていた。

一般的には、2014年の統一地方選挙は2期目を務める馬総統の中間テストとみなされ、その施政が問われたほか、2016年に控えた総統・立法委員選挙の前哨戦と位置づけられていた。第2次馬政権は2012年にスタートしたが、声望は下降状態のままで、地方政府における国民党の総体的な業績も芳しくなく、逆に民進党が執政する県・市の施政満足度はいずれも国民党より良好なものとなっている。統一地方選前、一般世論はそろって総体的な社会の雰囲気は国民党に不利だと評価していたほか、党主席を兼任する馬英九が選挙の音頭を取って選挙に極めて深く介入したことが、致命的なダメージとなった。即ち、世論に疎い党主席が選挙プロセスに過度に関与し、的外れの戦略やマネジメントをしたことが、却って国民党の選挙戦の最大の障害となったと言える¹¹。

2014年11月29日夜に明らかになった選挙結果は専門家も驚くもので、22の県・市長ポストのうち、民進党から13人が当選し、新たに基隆市・桃園市・新竹市・台中市・彰化県・嘉義市・澎湖県で勝利した。民進党が支持した無所属の柯文哲が当選した台北市を加えると、ブルー陣営の政治版図が更に縮小したことが分かる。国民党は元の15から6までポストを減らし、再選された新北市の朱立倫で

¹¹ 選挙結果にかかる国民党の分析報告によると「有権者が投票行為により政権運営に対する不満を示した」ことが六大敗因の一つとして挙げられている。羅暉智「國民黨提敗選報告 矛頭指向「柯文哲效應」『風傳媒』2014年12月10日、<http://www.stormmediagroup.com/opencms/news/detail/3dfcce13-8059-11e4-b7fe-ef2804cba5a1/?uuiid=3dfcce13-8059-11e4-b7fe-ef2804cba5a1>（2015年1月19日）を参照。

さえ、3万票差の勝利であった。台北市では無所属の柯文哲が当選し、その得票は民進党の得票率には含まれないが、民進党の票が大きく貢献したことは明らかである。更に、台北市では民進党が擁立した27名の市議候補が全員当選しており、これはまた台北市における今後の民進党の影響力が軽視できないことを示している。同統一選挙で、国民党は当選者数及び得票率でいずれも「惨敗」したということが出来るが、対岸で選挙の行方にこの上ない関心を払っていた中国政府は、この選挙結果をどう受け止めたのであろうか。

四 統一地方選の結果に対する中国の反応

中国が台湾の選挙に介入するのは、想定内のことであるが、中国が国民党の選挙戦の足かせとなる可能性もある。2014年3月のひまわり運動では、反中が運動の焦点の1つであったことは明らかであり、また、9月28日以降の香港占拠事件も反中の動きであった。これは、若者或いは民主的思考が強いグループが、中国政府による長年の対台湾政策やその姿勢に対して不満・不信感・不信任を募らせていることを意味する。台湾・香港における2つの運動の発展過程は、大きな共鳴を呼び、その共鳴がまた選挙過程において反中の雰囲気強化していった。勢いが落ちた馬英九と中国のマイナスのイメージが相まって、その結果は推して知るところとなった。一般的にはすでに、中国は目に見える方法、見えない方法をとともに駆使して国民党の勝利を支持しているという型通りの印象があるが、国民党からすれば、その政権の合法性は台湾内の選挙に依ることから、如何にして中国の後押しを受けつつ、レッテルを張られないようにするか、高度なテクニックが求められるわけで、時にはいずれともやり難い局面を迎える。

選挙期間中、兩岸問題は極めて敏感なものとなり、国共は台湾の

独立反対において共通の利益を有したものの、国民党は中国の後押しに答えることはできなかった。馬英九は2014年9月29日午前、圓山ホテルで開催された世界台湾商会連盟のイベントに出席して挨拶した際、香港の占拠事件について、「普通選挙を求める香港の人々の要求はよく理解でき、これを支持する。同時に中国には香港人の声に耳を傾けるよう、また香港人には平和的で理性的な方法で訴えるよう呼びかける。将来、香港で普通選挙が実現すれば、それは香港、中国のいずれにとってもウィンウィンである」¹²と述べた。続く10月10日の国慶節の談話でも再び、普通選挙を望む香港人を支持するとの強い立場を表明し、合わせて中国に「今この時、中国はまさに民主憲政に向かう最適の時にある」と呼びかけた¹³。

馬英九の発言は十分慎重で注意深いものであったが、台湾を裏切ったと言われないように、また有権者の支持を失わないために、最終的にはやはり中国と対立する局面を迎え、中国に盾突く格好となった。そればかりか、個人的な歴史的金字塔を打ち立てるため、選挙期間中、馬英九は中国が受け入れることができないAPECに乗じての習近平との会談「馬習会」を積極的にたゆまず推し進めた。APECは国際的な場であり、これは兩岸の国際化にはかならないことから、中国側は会談を望まないばかりか、この行動は最終的に中国を怒らせることになり、中国は馬政権に対して報復措置をとった。2014年

¹² 新頭殻「馬英九：呼籲香港居民和平理性表達訴求」『奇摩新聞網』2014年9月29日、<https://tw.news.yahoo.com/%E9%A6%AC%E8%8B%B1%E4%B9%9D-%E5%91%BC%E7%B1%B2%E9%A6%99%E6%B8%AF%E5%B1%85%E6%B0%91%E5%92%8C%E5%B9%B3%E7%90%86%E6%80%A7%E8%A1%A8%E9%81%94%E8%A8%B4%E6%B1%82-021327957.html> (2015年1月19日)。

¹³ 王寓中「國慶演説 馬籲中國走向民主憲政」『自由時報』2014年10月11日、<http://news.ltn.com.tw/news/politics/paper/820622> (2015年1月19日)。

10月27日、共産党の党機関紙である環球時報は、「台湾の情報機関関係者が中国人留学生を取り込んで、中国帰国後、党政機関に就職し、将来、台湾に情報提供するよう求めた」と指摘し¹⁴、続く11月3日には再び、「自惚れる馬英九、中国は馬に何の借りもない」と題する馬政権批判の文章を掲載した¹⁵。この一連の動きは、中国が最終的に馬英九にひどい仕返しを与えたことを意味するだけでなく、中国は馬英九が国民党の選挙情勢にマイナスの影響を与えていることを理解し、馬と一線を引くことで、選挙過程において台湾の世論に反する者を支持したと濡れ衣を着せられることを避けようとした可能性があることがうかがえる。

しかし、中国が馬を批判したからと言って、国民党候補者を支持しないわけではなく、また、介入しないと主張したところで、実際に介入しないわけでもない。11月26日、馬曉光・國務院台湾弁公室（国台弁）スポークスマンはメディアに対し、「我々は一貫して台湾の選挙は台湾島内のことであると認識しており、これについてコメントせず、また特定の候補者に関して論評せず、ましてや仮定の問題について回答することはない。我々が注目しているのは、兩岸関係の平和的發展であり、『92年コンセンサス』がその重要な基礎である」と述べた¹⁶。中国側はこのように述べているが、こうした動きの背後には、特に台湾にいる中国人配偶者や中国にいる台湾人ビジネ

¹⁴ 羅添斌「中國官媒指控台諜案／我情治官員反擊：中生來台絕不單純」『自由時報』2014年10月28日、<http://news.ltn.com.tw/news/focus/paper/825305>（2015年1月19日）。

¹⁵ 社評「大陸不欠馬英九什麼、他應自重些」『環球時報』2014年11月3日、<http://opinion.huanqiu.com/editorial/2014-11/5188147.html>（2015年1月19日）。

¹⁶ 以下を参照。大陸新聞中心「國台辦發言人馬曉光 回應台灣「九合一」選舉」『今日新聞網』2014年10月22日、<http://www.nownews.com/n/2014/11/26/1522614>（2015年1月19日）。

スマンを利用している形跡が見られる¹⁷。つまり、同地方選挙は2016年の総統選挙に影響を与え、兩岸関係への影響が非常に大きいことから、多くの中国のグループ・組織は利用されて選挙後に影響を受けるのを恐れ、選挙前に台湾との交流を進めようとしなない。中国政府のシンクタンクに所属する学者は、民進党への敵意をむき出しにし、民進党が兩岸政策を調整しようとするのであれば、2016年の選挙でも敗北すれば良いとさえ述べている¹⁸。

しかし、中国は人員を派遣して選挙戦を観察しており、国民党がこれほど惨敗するとは事前に予想できなかったとしても、民進党がいくらかの勝利を収めることについては心の準備ができていただろう。2014年11月29日の選挙日夜、結果が明らかになると、馬スポークスマンは落ち着いてこれを受け止め、「我々は今選挙の結果に注意を払っている。兩岸の人々が、兩岸関係における容易でない成果を大切に、共に兩岸関係の平和と発展を擁護し、これを維持し続けていくことを望む」と述べた¹⁹。中国は極めて慎重に評価を行っており、ハイレベルは台湾におけるグリーン陣営の拡大に大きな憂慮を抱いているが、戦略的には、メンツを保ち国家の権勢を示すため、心の底にある懸念を対台湾政策に反映することはないと見られる。しかし、2016年に民進党が与党に返り咲く可能性があることから、こうした平静さは長くは続かず、中国は何らかの政策を打ち出し、アクションを起こすだろう。

¹⁷ 民報觀點「連營告急北京出手」『民報』2014年10月22日、<http://www.peoplenews.tw/news/ca66a89e-9b48-4497-80aa-444f6c6ccfaa> (2015年1月19日)。

¹⁸ 嚴安林「嚴安林：台灣“九合一”選舉對兩岸關係有影響」『華夏經緯網』2014年11月19日、<http://big5.huaxia.com/thpl/sdfx/4156426.html> (2015年1月19日)。

¹⁹ 中央社電「國台辦盼兩岸珍惜得來不易成果」『中央通訊社』2014年11月29日、<http://www.cna.com.tw/news/acn/201411290288-1.aspx> (2015年1月19日)。

五 2016年総統選挙までに中国が採り得る対台湾政策

2014年12月3日、オバマ米大統領はビジネス界との対話の中で、「おそらく習近平は鄧小平以降、最も早いスピードで全面的な権力を掌握した指導者だろう。習近平が権力を掌握してからまだ1~2年しか経過していないが、中国内部における習近平の権力にかかる皆のイメージは強い」と述べている²⁰。はっきり言えば、2012年末の中国共産党第18回全国代表大会後、習近平は胡錦濤から十分な資産を受け継いだ。これは前例にない程のひどいポストでもあり、直面した内外関係にはいずれも深刻な悪化の形跡が見られた。習近平が直面する課題は前代未聞のもので、その困難さは江沢民や胡錦濤を凌ぐものである。しかし、指導者の権力集中において習近平の右に出る者はいない。まず、ライバルであった薄熙来のスキャンダルを早目に暴いてリスクを一気に下げ、紅二代として、父であり改革開放で要職を務めた習仲勳の威光を傘に着、自ずと江沢民・胡錦濤が望む以上の政治社会的基盤を得た。更に、江沢民は1997年まで鄧小平の命を聞かざるを得ず、胡錦濤は10年の執政期間中一貫して江沢民の暗い影の下にあったのに対し、習近平は陰の支配者による制約から逸早く逃れることができた。このような絶好のタイミングを得て、現在のところ習近平は大きな権力を握っていると言える。

これに基づいて将来を展望すると、今後十年の兩岸関係の発展は、概ね習近平が如何に対台湾政策をとらえ、これに対処するかによって決まるだろう。まず、習近平の性格について見ると、文革による社会化プロセスを経験した世代であり、その闘争性は想像を超える

²⁰ 「奥巴马評習近平 後鄧時代掌權最快領導人」『超越新聞網』2014年12月4日、
<http://beyondnewsnet.com/20141204-obama-talks-about-xi-jinping/> (2015年1月19日)。

ものがある。ただ、1980年代以降における経済的躍進の成果が、文革の影響を受けて盲動的になり、望みを失った紅衛兵世代の人に、心理的制約を与えることは免れないだろう。習近平の政治スタイルは、民族主義を声高に訴えるものの、実際の行動は「弱火でぬるま湯を沸かす」といった控えめなもので、その「発言」と「行動」には落差がある。発言内容からすると、理想主義者のように見え、外的要因へは時に過激な言葉で反応するが、実際の手法や措置はむしろ柔軟な実務主義者である²¹。習近平自身、博士学位を有しているが、改革開放にかかる長年の経験からしても、むしろ経済の実務者であって、学者上がりの政治家というスタイルではない。

次に習近平が直面する体制的な制約について論じる。中国が改革開放路線を採り、国際的に台頭して以降、民主主義国家は常に政治の左傾化と経済の右傾化に疑問を抱いているが、中国のエリート指導者は、ソ連の崩壊から、西側の民主主義改革は中国の国情にはそぐわず、変化は必ず既存の安定した枠組みの中でなされるべきであるとの教訓を得た。2014年10月20日から23日にかけて開催された中国共産党第18期中央委員会第四回全体会議では、「法による国家統治」の全面的な推進についてトップレベルの整備と総体的な配置を行うよう求めている。習近平は、「法を尊ぶものが強く、法を尊ぶ国が強い」と信じており、よって、「法による国家統治」にかかる様々な整備や措置を一つ一つ着実に全面的に推進するよう主張した²²。実際のところ、「法による国家統治」の概念は、習近平から始まったも

²¹ 顔建發「習近平對台政策的可能架構與內涵」『台灣國際研究季刊』第9卷第4期(2013年冬季)、頁42。

²² 「中共三中全會閉幕設國安委和改革小組」『BBC 中文網』2013年11月12日、http://www.bbc.co.uk/zhongwen/trad/china/2013/11/131112_china_cpc_meeting_ (2015年1月19日)。

のではなく、中国がその長い経験からたどり着いた結論である。中国の指導者は90年代以降、経済発展を維持しつつ社会的安定を維持する治国のあり方を模索してきており、ここから、大局的な計画に従いながら、既存の政策方向を維持し、「チャイナドリーム」というトップデザインの下、「タイムテーブル」に合わせて政策方針を着実なものとし、法に依ってこれを整えようとしていると判断できる。但し、コインに裏表があるように、「法による国家統治」を治国の道とするには、自ずとそれ自身がその過程で起こり得る衝撃や過激な行為を制限することにもなる。

続いて、習近平が直面する大局的な環境について見ると、これもまたある種の制約となるだろう。実際、2012～2014年において、習近平は外交面で厳しい試練を経験した。2012年6月21日、中国が西沙を海南省の管轄としたのに対し、ベトナムは海洋法を可決して、西沙を国土として組み入れ、両国は一夜にして敵対的な関係となった。9月5日、フィリピンは南中国海（南シナ海）の正式名称を「西フィリピン海」と改名し、活発な交流から、一触即発の状態となった。9月11日、日本が尖閣諸島をその版図とすると、日中は正面から矛を交えることになり、10月20日、インドが中印国境紛争50周年を高らかに記念すると、翌年の4月中旬まで中印国境付近では両国の軍がキャンプを張って対峙し、改善が難しい中印関係に再び影を落とした。同年11月19日には、オバマ大統領がミャンマーを訪問したことで、20数年に及ぶ盟友関係は一朝にして形を変えた。更に2014年、5月13日にベトナムで発生した大規模な中華排斥運動に対して、中国は驚愕するばかりで、ただ耐え忍ぶしかなく、7月1日に日本が集団的自衛権を承認し、米国と負担を分かちことになったことについても、なす術がなかった。実際のところ、中国と周辺諸国間の矛盾は高まっている。胡錦濤時代に中国が掲げた平和的発

展はすでに限界に達し、米中関係も協力より対抗に向かっているほか、米国をはじめとする民主主義諸国と中国の間には不和が生じ、連携して中国を囲い込もうとする動きが見られ、中国は国際社会において孤立している²³。

2014年8月以降、中国の外交的雰囲気は徐々に好転したが、背景からすると、中国は2014年の外交を「主场（ホームグラウンド）外交」と位置づけ²⁴、同年の重要イベントであるアジア太平洋経済協力会議を卒なく開催し、メンバーとしての役割をしっかりと果たすために、耐え忍ぶほかなかったというのが実のところかもしれない。また、11月中旬に開催されたアジア太平洋経済協力会議からは、中国が外交の重心を「安全保障」から「経済貿易」へと移したことが明らかに見て取れ、依然として経済貿易を軸とする政策方針をその方向としていることが分かる。つまりこれはある種の才能を隠して外に出さないやり方である。マクロ的秩序から判断すると、中国の当面の国家発展戦略からすれば、兩岸関係においては、ひまわり運動、香港占拠事件を支持する馬の国慶節の談話、統一選挙におけるグリーン陣営の圧勝といったいくつかの荒波はあるが、中国がこうした荒波をコップの中の嵐に過ぎないと見ていることは間違いない。下の者を悪人として上の者が善人を演じるという中国の文化的習慣からしても、統一選挙以降におけるハイレベルとは言えない国台弁ス

²³ 顔建發『台湾的選擇：亞太秩序與兩岸政經的新平衡』（台北：新銳文創、2014年）、頁192。

²⁴ 2014年3月11日、王毅・外交部長は国際的な記者会見の場で、2014年の中国外交の特色の一つは「ホームグラウンド外交」と述べた。この年中国では二つの大型国際会議（アジア信頼醸成措置会議首脳会合（上海、5月）、APEC（北京、10月））が開催された。以下を参照。「外交部部長王毅答記者問」『人民網』2014年3月8日、<http://lianghui.people.com.cn/2014npc/GB/376648/382416/>（2015年1月19日）。

ポークスマンの発言も極めて妥当で、語気も乱れず冷静なものだったことから、ここからも最高政策決定者である習近平が、兩岸が既存の平和的発展のルールに戻ることを依然として望んでいることが分かる。統一選挙の結果、国民党が惨敗し、グリーン陣営が版図を拡大したことに中国は焦りを感じているであろうが、短期間内における対台湾政策とその行動は、大国としての国家発展政策の長期性と安定性を維持するため、引き続き大枠は指導を強化しながら、小さなことは自由にさせ、既存の立場と主張を堅持すると同時に、統一選挙結果と一大事業である統一の矛盾を希薄化し、狭め、更には切り離していくといったものになるだろう。

当然、台湾内部におけるブルー陣営の縮小とグリーン陣営の躍進に対し、中国は「発言」よりも「行動」で国民党の統一戦線を崩壊させない策を練るだろう。中国は台湾内部の統一派の声を如何にして落ち着かせるか検討し、たとえ大した期待は抱かないにしても、馬政権にはその任期中に兩岸交流に有利なことをできるだけ多くやらせようとするだろう。馬が受けた痛手は大きく、またその対応からしても、期待を抱くのは難しい。このほか、中国は有権者の票が国民党から「台湾独立」に流れることを警戒しており、その立場をより明確に説明すると同時に、行動でもボトムラインを「複雑化」させ、一本のボトムラインから数本のボトムラインへと転換し、より実務的にして柔軟な方法で友好を示してくるだろう。中国は兩岸の経済貿易に更に力を入れ、台湾に利益がある経済貿易措置をより多く打ち出し、両陣営に対する要求も徐々に変え、「兩岸の相互利益・繁栄を構築することに利があり、また心ある」者に訴えかけたり、台湾企業や民進党が執政する県・市のリーダーに対する統一戦線を敷くことで、民進党が再び陳水扁路線に戻るのを防ぐため、「中国に従うものは栄え、逆らうものは滅びる」といった柔和の中に剛

あるメッセージを発してくるものと予想される。つまり、たとえ民進党が政権に返り咲いたとしても、兩岸関係の規律から逸脱させない策を練ってくるだろう。

中国は民進党政権の返り咲きに如何に対応すべきか予め検討し、早い段階から民進党政権誕生に対する防波堤を築き、その衝撃を最低限に抑え、たとえ民進党政権が発足したとしても、既定のゲームルールで事を進めなければならないようにするだろう。中国は民進党が執政する地方の県・市との交流を利用して、民進党中央の中国政策の方向に影響を与えようとするであろうし、また、政党政治を迂回して、庶民レベルに深く入り込み、利害を共にする利益集団を育成することも考えられる。しかし、中国が「己を中心とし、己に利がある」やり方を貫いた対台湾政策を練る可能性もある。これは、「一方的にできるところは先にやってしまう」といった考えに近いもので、対台湾政策の重要な指導原則の1つになるかもしれない。また中国は日米が介入するか否か、どのような形で介入するかに関心を払っているが、習近平自身、「知米派」であるといえ、米国に対し非現実的な幻想を抱くことはないだろう。中国は民進党に対し、台湾独立は戦争を意味すると脅し、更にこれを日米にも伝え、日米には態度を表明するようあれこれ仕掛けている。中国は依然として米国を利用して台湾に圧力をかけようとしているが、米国に対して過度な期待を抱くことはできず、仮に米国と衝突することになっても、行動より言葉のあやが行き過ぎたというところだろう。

六 結論

国民党は先の統一地方選挙で議席数及び得票率ともに「惨敗」し、有権者は馬英九が率いる国民党政権に対する不信を示した。兩岸政策は台湾政策の要であり、国共が緊密に結託しているため、中国の

対台湾政策に対する台湾世論の懸念が間接的に反映されたと言える。統一選の選挙結果は馬英九を完全に打ちのめすもので、ポスト馬時代が前倒しで訪れたが、現在、国民党内で表舞台に立っているメンバーからすると、勢いを盛り返し、国民党を逆転に導くような力を具えたりリーダーは明らかにいない。こうした状況下では、中国共産党の現実的な特徴からしても、たとえ習近平が国民党を手助けしたいと思っても、その介入レベルは低いものとなるだろう。大々的に介入したところで、国民党を支えきれないなら、習はメンツのやり場がなくなり、またその後の民進党との接触における障害が増すだけである。

また、習近平側からすると、仮に習に台湾についての十分な認識があるなら、中国がチャイナドリームを追及するうえでの現実的な制約を理解していないはずがない。既存の対台湾政策や戦略的操作が及ぼす影響を受け、中国は再び硬軟織り交ぜ、地域毎に応じたやり方を用いてくるだろう。過去、国民党の特定の人物が两岸交流による利益を独占していたことに鑑み、中国は自身のネットワークの土台や運営をより重視し、よりダイレクトなやり方で、手元にある経済的カードを駆使し、グリーン陣営の関係者、とりわけグリーン陣営が執政する各県・市、或いは各階級の会議、及びに一般庶民とより直接的に関わるよう全力を傾けてくるだろう。

対台湾政策においては、中国はこれまで飴と鞭を使い分けてきており、一定の範囲内で国民党を全力でサポートして、淪落しないようにする一方、民進党に対しては依然として飴と鞭、硬軟織り交ぜた措置を採ることが予想される。災いを避けて福を呼び込もうとする中で、中国は手綱を締めたり、緩めたりしながら、台湾の大局的な政策が想定した方向に向かうよう仕向けてくるだろう。現在、中国の政治経済力は最高位に達しており、習近平は更に権力固めを進

めているが、上述した通り、習近平は文革の教訓と経済改革の経験、法による国家統治の過程における衝撃と急進的な制約、及び国際社会からの孤立状態といった影響を受けていることから、中国は発言的には強硬路線のトーンで、少なくとも態度を軟化させることはないだろうが、強硬路線が軍事行動に至ることはなく、心理的な威嚇や米国を通じた台湾への圧力といったやり方で、民進党が行き過ぎないように凶るだろう。つまり、強硬な政策の実施を全く憚らないのではなく、中国も台湾の人々に盾突くことを懸念している。中国にとっては統一が重要であり、台湾が完全にシステムの的に中国に統合される前に、軍事的威嚇を行うことは考えにくい。軍事的威嚇は口先の脅しに過ぎず、孫子の兵法でいうところの「上兵は謀を伐つ、其の次は交を伐つ、其の下は城を攻むる」である。中国は孫子の兵法の発祥地であり、中国の指導者は虚々実々の心理戦に長けている。もとより求めている安定の追及をひた隠しながら、習近平は様々な心理戦を駆使して、戦わずして台湾を屈服させるべく、台湾に対して脅威を加え、利益で誘惑し、分裂を目論んでくるだろう。

2007年、温家宝は中国の発展はある種の「不安定」、「不均衡」、「不調和」にして「持続不可能」な状態にあると述べたが²⁵、まさに真相を言い当てており、現在でもその状況は変わらない。習近平は胡錦濤・温家宝の資産を継承したが、より多くの負債をも受け継いだ。改革を進めねばならないが、システムを崩壊してはならず、筋を痛めたとしても骨に手を付けることはできず、習近平は寝ても覚めても休まることはないだろう。改革の逼迫度合いからすると、反汚職は単にクリーンな政治を求めているのではなく、社会経済モデ

²⁵ 余華華「中國經濟是否不平衡」『新浪財經人民網』2012年7月6日、<http://finance.sina.com.cn/stock/hkstock/marketalerts/20120706/092612496384.shtml>(2015年1月19日)。

ルの転換にかかる権勢の阻止を取り払うという大きな戦略的考えからきている。上述の習近平が立ち向かうことになる深刻な課題、指導者としてのスタイル、システムの均衡から安定した環境の中で集団意識の変化を模索する中国共産党といった視点から総合的に分析すると、台頭する「中国の皇帝」²⁶である習近平は、対内外にかかわらず、しばしば粗暴な発言や表情を見せるが、全体的な政治運営からは、安定を求める隠れた形跡を見ることができる。ただ、中国共産党第 19 回全国代表大会、すなわち 2017 年までに、習近平が内外関係についてある程度掌握した場合、個人的な歴史的金字塔を打ち立てようとするあまり、対台湾政策において全く新しい行動を起こすことがあるか、引き続き注視していく必要がある。

(寄稿：2015 年 1 月 22 日、再審：2015 年 2 月 26 日、採用：2015 年 3 月 2 日)

翻訳：渥美すが子（フリーランス翻訳者）

²⁶ 張海「三中全會後 習近平成中國新沙皇」『今周刊』883 期、2013 年、<http://www.businesstoday.com.tw/article-content-80396-103873> (2015 年 1 月 19 日)。

2014 年台灣九合一選舉及北京對台政策的展望：一個綠營的觀察

顏建發

(健行科技大學企管系教授)

【摘要】

台灣的大型選舉對北京的對台政策都會產生很大的影響。2014 年的九合一選舉雖是地方性的，但其種類與規模皆是前所未有的，因此被認為是觀察 2016 年總統大選的重要指標。而 2014 年 11 月 29 日選舉的結果是，不管席次或得票率皆出現國民黨慘敗而民進黨大勝的結果。這也是北京所不樂見的。那麼，面對這種狀況，北京的對台政策是否會面臨一番衝擊而改變？本文認為，北京對台政策的內容或有改變，但架構與基調因會維持，理由是基於習近平的性格養成、政治體制以及外在大環境的約制，目前仍會持續既有穩中求進的基調，在對台政策上仍會依循既有大方針，來包圍與吸納台灣，並軟硬兩手，並藉由心理戰謀台，以求不戰而屈人之兵。

關鍵字：2014 年台灣九合一選舉、北京對台政策、國民黨、民進黨、兩岸關係

Taiwan's 2014 Nine-in-One Elections and the Prospects of Beijing's Taiwan Policy: A Green Perspective

Jiann-Fa Yan

Professor, Department of Business Administration, Chien Hsin University

[Abstract]

Taiwan's big-scaled elections have always had strong impacts on China's Taiwan policy. The 2014 nine-in-one elections were a collection of local elections, but due to their variety and unprecedented scales, it was considered as an important indicator to the 2016 presidential elections. On November 29th, 2014, the KMT was fiercely defeated both in seats and votes won, thus giving way to a big triumph for the DPP. This is an undesirable result for Beijing. Hence, under these circumstances, one question will be raised: will the 2014 elections bring about strong impacts and push Beijing's Taiwan policy to change? This paper indicates that even though there will be some slight changes of its contents, the policy's fundamentals and framework will remain consistent. Some reasons are: Chinese President Xi Jinping's mindset and the constraints of Chinese political institutions and the external challenges he has to face. This paper argues that Beijing will keep its Taiwan policy progressive with stability. It will follow up the given track and take a carrot-and-stick approach, with psychological tactics, to contain and absorb Taiwan into its embrace, and finally, to win the battle without shedding a drop of blood.

Keywords: Taiwan's 2014 Nine-in-One Elections, Beijing's Taiwan Policy, KMT, DPP, Cross-Strait Relations

〈参考文献〉

- 「中共三中全会閉幕設國安委和改革小組」『BBC 中文網』2013 年 11 月 12 日、
http://www.bbc.co.uk/zhongwen/trad/china/2013/11/131112_china_cpc_meeting_ (2015 年 1 月 19 日)。
- 「外交部部長王毅答記者問」『人民網』2014 年 3 月 8 日、<http://lianghui.people.com.cn/2014npc/GB/376648/382416/> (2015 年 1 月 19 日)。
- 「奧巴馬評習近平 後鄧時代掌權最快領導人」『超越新聞網』2014 年 12 月 4 日、
<http://beyondnewsnet.com/20141204-obama-talks-about-xi-jinping/> (2015 年 1 月 19 日)。
『百度知道』、<http://zhidao.baidu.com/question/235183978.html>。<http://opinion.huanqiu.com/editorial/2014-11/5188147.html> (2015 年 1 月 19 日)。
- 卜睿哲著、林添貴譯『台灣的未來：如何解開兩岸的爭端』(Untying the Knot: Making Peace in the Taiwan Strait) (台北：遠流、2011 年)。
- 大陸新聞中心「國台辦發言人馬曉光 回應台灣「九合一」選舉」『今日新聞網』2014 年 10 月 22 日、<http://www.nownews.com/n/2014/11/26/1522614> (2015 年 1 月 19 日)。
- 中央社電「國台辦盼兩岸珍惜得來不易成果」『中央通訊社』2014 年 11 月 29 日、
<http://www.cna.com.tw/news/acn/201411290288-1.aspx> (2015 年 1 月 19 日)。
- 中選會「歷屆公職選舉資料」『中選會選舉資料庫』、<http://db.cec.gov.tw/histMain.jsp?voteSel=20091201C2> (2015 年 1 月 21 日)。
- 王寓中「國慶演說 馬籲中國走向民主憲政」『自由時報』2014 年 10 月 11 日、
<http://news.ltn.com.tw/news/politics/paper/820622> (2015 年 1 月 19 日)。
- 民報觀點「連營告急北京出手」『民報』2014 年 10 月 22 日、<http://www.peoplenews.tw/news/ca66a89e-9b48-4497-80aa-444f6c6ccfaa> (2015 年 1 月 19 日)。
- 余華華「中國經濟是否不平衡」『新浪財經人民網』2012 年 7 月 6 日、<http://finance.sina.com.cn/stock/hkstock/marketalerts/20120706/092612496384.shtml> (2015 年 1 月 19 日)。
- 社評「大陸不欠馬英九什麼、他應自重些」『環球時報』2014 年 11 月 3 日、南方朔「南方朔：史上得票最低的黨主席」『蘋果即時』2015 年 1 月 20 日、<http://www.appledaily.com.tw/realtimenews/article/forum/20150120/544971/%E5%8D%97%E6%96%B9%E6%9C%94%E7%BC%9A%E5%8F%B2%E4%B8%8A%E5%BE%97%E7%A5%A8%E6%9C%80%E4%BD%8E%E7%9A%84%E9%BB%A8%E4%B8%BB%E5%B8%AD> (2015 年 1 月 20 日)。
- 張海「三中全会後 習近平成中國新沙皇」『今周刊』883 期、2013 年、<http://www.businesstoday.com.tw/article-content-80396-103873> (2015 年 1 月 19 日)。
- 新頭殼「馬英九：呼籲香港居民和平理性表達訴求」『奇摩新聞網』2014 年 9 月 29 日、
<https://tw.news.yahoo.com/%E9%A6%AC%E8%8B%B1%E4%B9%9D-%E5%91%BC%E7%B1%B2%E9%A6%99%E6%B8%AF%E5%B1%85%E6%B0%91%E5%92%8C%E5%B9%B3%E7%90%86%E6%80%A7%E8%A1%A8%E9%81%94%E8%A8%B4%E6%B1>

- %82-021327957.html (2015 年 1 月 19 日)。
- 路懷宣「年底七合一、民進黨『會嚇死』！」『udn 評論台』2014 年 1 月 28 日、
<http://blog.udn.com/ntlutw/10820790> (2015 年 1 月 19 日)。
- 謝相慶「2014 年九合一地方選舉之評估與效應」『國政研究報告』財團法人國家研究所、
<http://www.npf.org.tw/post/2/13654> (2015 年 1 月 19 日)。
- 顏建發「國民黨的中國政策」『台灣國際研究季刊』第 9 卷第 2 期 (2013 年夏季號)、頁 74。
- 顏建發「習近平對台政策的可能架構與內涵」『台灣國際研究季刊』第 9 卷第 4 期 (2013 年冬季)、頁 42。
- 顏建發『台灣的選擇：亞太秩序與兩岸政經的新平衡』(台北：新銳文創、2014 年)。
- 羅添斌「中國官媒指控台諜案／我情治官員反擊：中生來台絕不單純」『自由時報』2014 年 10 月 28 日、<http://news.ltn.com.tw/news/focus/paper/825305> (2015 年 1 月 19 日)。
- 羅暉智「國民黨提敗選報告 矛頭指向「柯文哲效應」」『風傳媒』2014 年 12 月 10 日、
<http://www.stormmediagroup.com/opencms/news/detail/3dfcce13-8059-11e4-b7fe-ef2804cba5a1/?uuid=3dfcce13-8059-11e4-b7fe-ef2804cba5a1> (2015 年 1 月 19 日)。
- 嚴安林「嚴安林：台灣“九合一”選舉對兩岸關係有影響」『華夏經緯網』2014 年 11 月 19 日、
<http://big5.huaxia.com/thpl/sdfx/4156426.html> (2015 年 1 月 19 日)。
- 蘇起「馬政府時期兩岸關係的概況與展望」蘇起、童振源編『兩岸關係的機遇與挑戰』(台北：五南、2013 年)、頁 25。

